

心は神に、手は人に

奨励	立石 真崇【たていし・まさたか】
奨励者紹介	救世軍泉尾小隊・神戸小隊牧師

イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。一狼は羊を奪い、また追い散らす。一彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

(ヨハネによる福音書 10章7―18節)

御言葉の響き

今日のチャペル・アワーに集われたお一人おひとりに、またこの場所の賛美の声を耳にしているであろうお一人おひとりに、神の祝福をお祈りします。私は今日のはじめてこのキャンパスにうかがいました。事前にいただいた案内に「青空チャペル」という言葉があり、どのような場所だろうかと想像していました。こちらに来て、建物のことではなく屋外の会場であるということを知り、新鮮な感じがしました。

私が所属しております教会の集まりは、「救世軍」(The Salvation Army)と言います。今から約150年前、イギリスのメソジスト教会の牧師であったウィリアム・ブース(William Booth)によって始められました。ブースは、当時の東ロンドンに社会から疎外された貧しい人びとが多くいる状況を知り、彼らのために伝道と奉仕を進めました。その際、彼が大切にしていたことは、ただ相手が来るのを待つのではなく、自分たちから出かけていくということでした。「ひどい人びとのもとに出かけていきなさい」(Go for the worst)というのが彼のモットーであったと伝えられています。現在では120以上の国々で救世軍は活動していますが、福音を必要とする人びと、神の愛を必要とする人びとのために出かけていくということには引き継がれています。そのような背景もあって、私たちは今でもしばしば路傍での伝道を行います。また、イエス・キリストご自身も、神の国を宣べ伝えるために旅をなさり、しばしば野外で人びとにお教えになっています。こういったことも考えると、今日の青空チャペルで賛美と祈りを共にできるということは新鮮であると同時に、親しみも覚えます。この機会を感謝しつつ、聖書の御言葉から祈りの導きと与りたいと願います。

良い羊飼い

ご一緒にお読みしました聖書、ヨハネによる福音書10章7―18節のなかで、イエス・キリストはご自身について次のように述べておられます。

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(10章11節)

イエス・キリストはどこか建物の中で人びとを待ち、ご自分のところに来た人びとだけを相手にするという方ではありませんでした。自らさまざまな所に足を運ばれ、人びとと出会い、語り合われました。そしてこの箇所ではご自分を「良い羊飼い」として示しておられます。イエス・キリストが私たちにとってどのような方であるかを知るということは、言い換えれば、自分にとって「良い羊飼い」がいるということを知ることだということです。

さて、「良い羊飼い」と言われるときの「良い」とは何を指しているのでしょうか。たとえば餌を与え、安全を守り、環境を整えて群れを増やしていくような仕事ができる羊飼いが良い羊飼いである、と言うこともできるかもしれませんが、しかし、イエス・キリストが繰り返し述べておられるのは、良い羊飼いは何よりもまず羊のために「命を捨てる」ということです。(11、15、18節)ここで「命を捨てる」という言葉をさかのぼって調べてみると、「命を置く」という意味があります。良い羊飼いは、羊を深く心にかけて、自分の命を寄り添わせるのです。

これと対照的に登場するのが「雇い人」です。雇い人は危険が迫るならば、自分の身を守るために簡単に羊から離れてしまいます。羊のために自分の命を捨てることはしません。良い羊飼いと雇い人を分けているのは、羊を「自分の羊」として「知っている」か、そうではないかという点です。(12、14節)聖書において「知る」という言葉は、相手の存在を大切にする、命を愛することと結びついて用いられています。たとえば、私たちの日常を考えてみても、人を思いやり、大切にしようとするならば、相手がどのような人であるのか、どのような事情があるのかを理解することが欠かせないことを経験しています。もし、相手をよく知らないのに、自分だけの考えで思いやりを示したとしても、一方的な気持ちの押し付けに終わってしまう場合があります。知ることと、愛することは切り離すことはできません。

イエス・キリストはまた、良い羊飼いが羊を知る関係について、「父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである」(15節)とも述べておられます。天の父なる神と、神の御子との関係は互いに愛をもって受け入れ合う関係です。ですから良い羊飼いと羊の関係もまた、神の愛が映し出される関係です。イエス・キリストは、私たちの心や生活を神の愛という大きな文脈のなかに置いてくださるのです。

外に向かい、
広げる神の愛

さて、良い羊飼いとしてご自身を示されたイエス・キリストは、どこに向かおうとされるのか、どのように羊を導かれるのかについても語っておられます。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」(16節)

ここで「囲い」に入っている羊と、入っていない羊が登場します。この表現の背景として当時、神から律法を与えられた神の民・ユダヤ人と、それ以外の人びと・異邦人との間に区別があったことが指摘されています。それは当時の多くの人にとっては越え難い隔たりでした。このような話は聖書の時代に限らないのではないかと思います。しばしば共に支え合って生きることが大切だということが語られます。多くの人がその大切さについて承知しています。しかし、共に生きる大切さを言いながら、それを実現していくことが難しいということもお互いが味わうことではないでしょうか。めいめいが自分の今いる所、「囲い」を越えることには不安や恐れを覚えます。あるいは、これまでの失敗や苦い体験が私たちの心を重たくすることもあります。

しかし、イエス・キリストは、囲いを自由に越えて、囲いの内も外もご覧になり、新しい地平を見つめて進まれた方です。「囲いに入っていないほかの羊」がいることも心に留められ、羊がみな「一つの群れ」となることを目指されました。ひと握りの人びとではなく、すべての人が集められて、神に受け入れられるために歩み続けてくださいました。命を捨てるという御言葉の通り、十字架の死がご自分の進む先に待っていることも引き受けてくださいました。私たちのために自ら新しい道を進んでくださるイエス・キリストによって、私たちもまた新しい歩みに立つことができます。そして、十字架の死の後にも、復活によって、イエス・キリストは今も私たちに新しい道を指し示し、この道を進んでいきなさいと励ましてくださるのです。

日本における救世軍、
山室軍平

最後に、一つの信仰の証として、私たちの教会、救世軍において伝道の生涯を送った人物を紹介したいと思います。その人の名前は、山室(やまむろ)軍平(ぐんぺい)と言います。明治初年昭和初期(1872―1940)までを生きた信仰者です。1895年に来日した救世軍にいち早く加わり、日本の救世軍の土台を築きました。

山室は岡山県で生まれ、向学心に燃えて10代で上京しました。印刷所に勤めて自分で生活をまかないながら、身を立てる機会を求めていました。そのときにキリスト教の路傍伝道に接し、イエス・キリストを受け入れ、信仰をもちました。

信仰をもった山室は、たびたび職場の同僚を教会に誘いましたが、「仕事をした上に、わざわざ肩のこるような話は聞きたくない」というような返事でなかなか応じてくれる人がいなかったということです。そこで山室はあらためて注意して教会の話の聞いてみると、同僚の言うことにも一理ある、たしかに教会で語られることと実際の生活には何か隔たりがあると感じたのです。そこで彼は、自分がその隔たりを埋めるような働きをしたいと考えようになりました。そして17歳の時、「一般の人びとが聞いて分かるように福音を伝える者としてください」と祈り、伝道者として立つことを決めたのでした。

その後、山室は同志社に入学し、伝道者となるべく学びます。苦学のために途中で学校を去らなくてはなりませんでした。同志社時代に得た友人を通して救世軍を知り、救世軍に加わりました。そして、日本人として最初の救世軍の士官(牧師)となり、伝道と奉仕の生涯を送りました。

山室も自分の生活の状況のなかで、「囲いに入っていない人びと」を見いだしました。そして、その人びとも福音が届くようにと願い、囲いを越え出る一步を踏み出したと言うことができますと思います。後に山室は、信仰生活の手引きとして記したある文章のなかで、「一人の救世軍人(救世軍の信徒)がいる所には、1メートル四方の天国があると言っても良い。そして、自分の周りに実現した神の御国をさらに押し広めるのだ」と述べています。その心は、今日の救世軍にも続いています。たとえば、私たちには士官(牧師)、兵士(教会

員)のための制服があります。礼拝・伝道・奉仕の機会には制服を身に着けて、さまざまな所をお訪ねします。これは、自分たちと自分たち以外を区別するために設定したものではありません。むしろ願うところはその逆で、イエス・キリストがいつでも、どこでも、誰にとっても変わることはない救い主、良い羊飼いであることを表すものとして用いています。

このキャンパスで学んでおられるお一人おひとり、自分の人生を形作る貴い時間を過ごしておられます。自分の考えをより確かなものにしていく時もあれば、いろいろな考えに耳を傾け合う時もあることでしょう。それと共に、今も私たちに御声をかけてくださる、良い羊飼いいエス・キリストを知る、新しい歩みが始められ、また導かれることをお祈りします。

〔参考文献〕

山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部 1929年

2012年5月23日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録